

三宅秀による「日本女子大学始業式」の講演について

頼住 一昭

愛知教育大学保健体育講座

A Study of Hiidsu Miyake's Lecture at the “Nihon Jyoshi Daigaku Shigyou Shiki”

Kazuaki YORIZUMI

Department of Health and Physical Education, Aichi University of Education.

キーワード：三宅秀，日本女子大学，講演

Key Words：Hiidsu Miyake, Nihon Jyoshi Daigaku, Lecture.

はじめに

三宅秀（1848－1938）は、幕末最後の蘭方医といわれた三宅良斎（1817－1868）^{注1)}の長男として江戸（東京）本所緑町に生まれる。

幼少の頃から父のすすめにより高島秋帆（1798－1866）などの家塾に入り、漢籍習字、英語、算術、蘭書にて歴史究理などを学ぶ。

その後、1864年には池田筑後守（1837－1879）を正使とする池田遣欧使節の一員^{注2)}となり約7か月間のヨーロッパを経験することとなる。

帰国後の彼は、1871年3月「大学出仕申付候事」（大学別当）を仰付けられ、大学東校（現在の東京大学医学部）中助教に任じ、1903年3月に東京帝国大学を退官するまで近代医学の教育と研究に終始一貫して携わった¹⁾。

医学者としての彼の功績は顕著であり、東京大学初代医学部長（1881－1890）をはじめ、帝国大学医科大学長（1881－1890）^{注3)}、1888年の学位令制定では日本初の医学博士、さらに、1893年には東京帝国大学最初の名誉教授となるなどいかめしき名誉職を擔う。その他、学者として初の貴族議員に勅選（1891年）され、1938年には勲一等瑞宝章を受章するなど、学者として受けることのできる最高の名誉をすべて受けている^{注4)}。

そんな彼は、近代医学教育の普及と発展に尽力するとともに、各地で行われた講演などを積極的

に行うほか、当時の日本人の健康および身体教育について、その改善を指摘し説論している。

彼のそれらの知見は衛生、服装、女子教育、武道、海外のスポーツ事情など多岐にわたっている。

そこで、本研究では近代日本の医学教育の基礎づくりに尽力した三宅による講演活動、なかでも、1906年9月11日に行われた「日本女子大学始業式」^{注5)}を取り上げ、医学界の重鎮であった三宅が医学者の立場からどのような考えを当時の女子学生に対して指摘し、説論していたのか、その内容を明らかにすることを目的とした。

なお、その手がかりは、これまでに体育・スポーツ史研究分野では明らかにされていない三宅自身が用いた「自筆講演用メモ」からその考察を試みた。

ここでいう「自筆講演用メモ」とは、三宅が講演を行う際に持っていた自筆のメモであり、彼はこのメモを持ち、読み上げていたという。

本稿で用いる「自筆講演用メモ」は、縦書き、用紙のサイズは縦約12cm・横約17cm、計4枚、万年筆でしたためられている。

ところで、三宅が行った「日本女子大学始業式」での講演内容については、1903年12月に塘茂太郎が編輯を行った『日本女子大学校 学報』の第二号において「教育衛生に就いて（三十六年九月講和）」²⁾と題して掲載されている^{注6)}。

したがって、「自筆講演用メモ」と「教育衛生

に就いて（三十六年九月講和）」の検討については別稿を期すこととし、本稿では、三宅が本講演にあたって女子学生に対し説論しようとはあらかじめ準備していた内容とはいかなるものであったかについて明らかにすることとする。

本 論

1. 日本女子大学と三宅秀との関わり

三宅がどのような経緯からこの講演を依頼されたかについては現時点では不明であり、今後の課題である。

しかしながら、日本女子大学から発行された『日本女子大学学園事典 創立 100 年の軌跡』には三宅に関する記載がいくつかあり、同書から三宅との関係を知ることができる。

まず、同書における「日本女子大学校創定期教職員一覧」には、「教授 衛生 医学博士 三宅秀」と記されている^{注7).3)}。

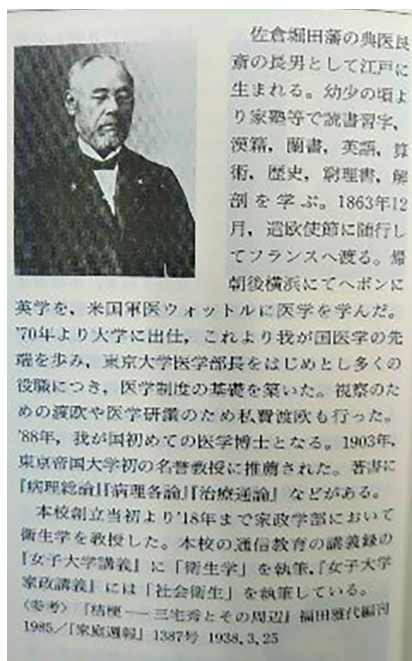


写真1 「人名欄」における三宅秀

さらに、「人名欄」において三宅は写真とともに人物紹介がなされており、出生地、生い立ち、医学者としての経歴などが紹介されるとともに、「本校創立当初より18年まで家政学部において衛生学を教授した。本校の通信教育の講義録の『女子大学講義』に“衛生学”を執筆、『女子大学家政講義』には“社会衛生”を執筆している」⁴⁾と記載されている。（写真1）

したがって、三宅は日本女子大学設立当初から教授職として「衛生学」の授業を担当していたことがわかる。

以上の記載を踏まえ、同書の項目にある「凡例」の冒頭には以下の通りに記されている。「この事典は日本女子大学の創立時から現在までの事項および学園に関係のある人々について簡単な解説を収録したものであり（以下、省略）」⁵⁾。

さらに、「2. 収録の基準（範囲と選定）」の項目では、次の通りに説明書きがなされている⁶⁾。

1) 事項について

(1) 設立運動期から現在（2001年3月）までの範囲。

(2) 学園の教学上の事がらを中心として選定した。

2) 人名について

物故者で

(1) 創立者・成瀬仁蔵が学園を設立する時にかかわった人物。

(2) 学園で教え教育上、影響のあった人物。

(3) 本学の卒業生で著名な人、あるいは学園に影響を与えた人物。

(4) 学園と深い関係があった人物。

以上のことから、三宅と日本女子大学との関係は、「2）. (1) 創立者・成瀬仁蔵が学園を設立する時にかかわった人物」、あるいは「2）. (2) 学園で教え教育上、影響のあった人物」であると考えられよう。

2. 「日本女子大学始業式」で行われた講演 内容の全容

三宅が用いた「自筆講演用メモ」の末尾には、
「三十六年九月十一日 日本女子大学始業式ニテ」
としたためられている。(写真2)

したがって、この講演は1903年9月11日に「日
本女子大学」における「始業式」にて行われたこ
とが確認できる^{注8)}。

以下、三宅が講演で用いた「自筆講演用メモ」
の全文を掲げ、その全容を明らかにする。

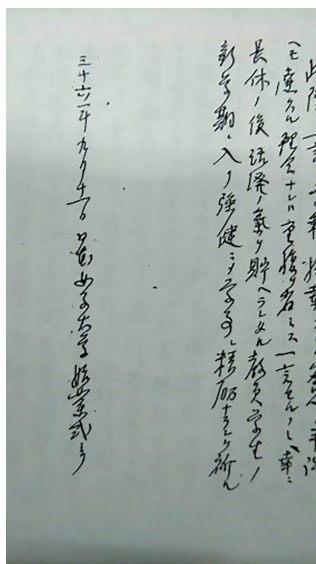


写真2 「自筆講演用メモ」の一部(個人蔵)

1
注9)

夏期休業ノ利用、夏期休業ハ何ノ為ニスルカノ問ニ
対シテハ容易ニ其養ヲ為スヲ得ヘシ、炎暑ハ身心ヲ勞ラス
ト甚シキヲ以テ盛暑ノ際ハ休暇スルナリト、而シテ此休業ハ学
生ニ吏員ニ実施セラルト雖モ実業ヲ操ル者ハ休止スル能ハサ
ル者多シ、本日ハ学生諸氏ニ対スル講話ナレハ主トシテ学校
衛生上ヨリ之ヲ論スヘシ、偕学校ニハ小学ヨリ大学マテノ別
アリテ各自休業ノ目的ヲ異ニス、又各学級事情異ニス
ルヲ以テ理論ハ単簡ナレトモ実行ノ■クシキト他ノ事項ニ全シ、
随ラ当事者間ニモ種々ノ議論アリ、然レトモ学校ノ等級
進ムニ從テ休業時ヲ利用シ、空費スルトナキヲ以テ五六十日
間ノ休業ニハ異議スル者漸ク減少セリ、小学ニ於テハ或ハ
学業全廢ニ及ハス、日々数時間ノ課業モ妨ケナカラント思
フ、但実行ハ頗ル難事ナリ、是レ往復ノ時間ヲ要スル
ヲ以テナリ、高等女学校以上ナレハ充分時ノ利用ヲ得ヘシ、
今日ハ此利用法ヲ述ヘテ間接ニ父兄方ヘ働ク旨趣ヲ
偕ヘシトヲ希フナリ、現今ハ尚ホ社会制度過渡ノ時季
ナルヲ以テ旧慣ノミヲ知テ欧米ノ風ヲ良知セサル人ハ、或ハ
一種ノ憐見ヲ抱懷スル家庭ナシトセス、依テ此機会ニ
乘シテ一言ヲ呈セントス、殊ニ婦女、老婆ハ保守的ノ性
質ヲ有スル故ニ夏期休業ニ対シテモ往々反対意見
ヲ懷カル、トナキヲ保セス、反対者ハ曰ク往時ハ此ノ如キ
休暇ナシ、又吾人ノ家政ヲ執ルハ一日モ空日ナシ、盛夏
ニハ業ヲ廢シテ旅行等ヲ為スハ家計ノ許サ、ル処ナリ、

2

今時ノ人ハ惰弱ナリ、贅沢ナリ、徒ニ歐人ノ風ニ模倣スルナリト、是レ一理ナキニ非ス、若シ此休暇ヲ利用セシテ空費センカ余モ亦旧幣家ニ左袒セントス
元來欧米諸国ノ夏熱ハ短期ナレトモ酷烈ナリ、故ニ学校等ニテ相当ノ休業ヲ設ケ、又中等以上ノ人土ハ避暑旅行ヲ行ヘリ、然レトモ本邦ノ如ク傲遊ヲ事トスルニ非ス、本邦ノ暑氣ハ強クシテ長シ、故ニ欧米人ハ之ニ堪ヘサルヲ以テ夏期ノ休暇ヲ必要トスルナリ、今吾人ノ行フ処ハ弊害ノ蟠ル処ヲ覺ラス、皮相上ヨリ洋人ノ為ニ処ヲ模スルハ真ニ戒心スヘキコト共ナリ、實際ノ事ヲ執ル者モ夏日五六十日モ休マサレハ其業ヲ持統シ能ハストセハ歎息至リナリノト思フ、併シナカラ避暑ノ為ニ旅行ヲ為スハ大ニ智識ヲ廣メ、危険ヲ避ケ、困難不自由ニ堪ユル如キ一般旅行ノ利益ヲ得、旁ラ清涼ノ氣中ニ運動スルナレハ体育、智育ノ側ヨリ裨益アルヤ勿論ナリ、然ルニ女子ハ旅行ニ於テ單身獨行好ム、旅伴ヲ得ルヲ困難ニシテ、隨意ニ移動シ難シ、假令今日ノ如ク交通ノ機関便利トナルモ、舟車ノ中、旅舎等ニ於ケル社會ノ風紀完成セサル間ハ相應ノ設計ナケレハ旅行モ亦容易ナラス、
欧米ニテハ女子ト雖モ修学旅行スルヲ便利ニシテ、且ツ廉直ニ、多数ノ日子ヲ經過スルヲ競ヘルノ風アリ、之ニ関リ風俗、物産、名所、古跡ヲ尋子、文学者ニモ、博物学者ニモ、亦各地ノ生計、状態ヲ目撃スルニ極メテ利益多シ、

3

東京女子美術学校ノ寄宿生ハ少数ナカラ
ノ海滨ナル某富豪ノ家ニ住シテ東京ニ在ル時ノ費用ヲ以テ自炊シ、家計ノ修学ヲ為セリト、女生徒ヲシテ住旅行ヲ為サシムルニハ最モ妙策ナラン、又他郷ヨリ遊学ニ來ル者ハ此旅行期ヲ以テ帰省スルヲ利用ノ一ナリ、何者ハ新社会、新家庭ヲ設ケシト欲スル者ハ属ニ自己ノ家庭ニ通信シ、交通ニテ学得シタル実地ノ景況ヲ表示スルノ必要アリ、教員モ亦直接ニ間接ニ教授ノ要旨ヲ家庭ニ熟知セシメテ往時ノ教育ノ如ク學問ト実地トノ別アルモノ、如キ觀念ヲ除去セシムルヲカムヘシ、家庭ニ於テハ今日ノ學藝ハ皆実地應用ニシテ空想ノヲ説クニ非ルヲ悟ラハ新家庭ヲ興スニ便宜ヲ興ヘ、其後備ヲ全カラシムルノ用意ヲ為スヘシ、
(支那學生ノ郷国ヘ戻リテモ此準備ナケレハ利益少ナカラン)、以上ハ旅行者ノ利用法ナリ、若シ旅行ノ必要ナキ人ハ其生地ニ在ルニ論ナリ、家族実習ノ好時期ナリトス、本校ニ於テモ家事実修ヲ行ハレタリト聞ク、余ハ自家ノ家庭ニ於テ父母ノ手伝ヲ為シ、土用掃除、(家整理整頓、修理等) 什具曝風、濯キ洗濯等家事ハ比較的多事ナルモノナリ、手回ニ宜シケレハ冬着ノ仕度ヲ為スヘシ、旁ラ吾カ学修セン事項ヲ実地ニ試シ、又ハ家庭ノ習慣ヲ改良、刷新スルモ可ナラン、斯ノ如シハ家庭

4

ノ父兄モ本校教育ノ主裁ヲ会得セラシ、家庭ト
学校トノ間隔■近ツクヲ■彼我意旨疎通

スルヲ得、始メテ公益トナリ、又学業ヲ卒ヘテ自宅ニ
帰ル時新家庭ニ移ルノ困難ヲ減スヘシ、人或ハ■ムレ
家庭トノ連絡ヲ得ル為ニハ毎年長時間休業

日子テ要セサルヘシト、是レ全ク実地ヲ知ラサルモノ、説ノミ、
如斯ハ可成徐々ニ進行シ、初年ニ試シタルヲ本

校ニ来リテ、之ヲ校友ニ活シテ、入学後即ニ■日 各自ノ意見ヲ述ヘ、
教員ニモ謀ルヲアルヘシ、而シテ次年ニ又改良進歩セル

所ヲ我カ家庭ニ植付ケ、卒業帰省ノ日ノ用意トス、
本校ニテハ常ニ校長其他ノ諸君ヨリ熱心ナル講

話アルヲ以テ多数ノ諸氏ハ■ホノ利用方ヲ執行セ
ラレシナラレト思ヘト、余モ亦此考ヲ平素抱持スル故

ニ此際ニ一言■学報ニ掲載スレハ各人ノ手許
ヘモ達スル御覧ナレハ重複ヲ省ミス一言セルノミ、幸ニ

長休ノ後活発ノ氣ヲ貯ヘラレタル教員学生ノ
新学期ニ入り強健ニシテ学事ニ精励ナランヲ祈ル

三十六年九月十一日 日本女子大学始業式ニテ

おわりに

三宅による日本女子大学における講演は、当時の日本にはあまり定着していなかった夏期「休業」（余暇）について、その必要性和過ごし方について教育衛生という視点から海外と比較するなどして、その効用をわかりやすく説き、女子の健康の維持・増進についてその重要性について説論している。

なかでも、特に筆者が目にしたのは「清涼ノ氣中ニ運動スルナレハ体育、智育ノ側ヨリ裨益アルヤ勿論ナリ」と指摘している部分である。

現在、残されている三宅の「自筆講演用メモ」には、日本女子大学始業式の他に女子柔術学校卒業式、淑徳女学校、日本女子教育会、女子学士師範学校、学習院女学部、私立婦人衛生会、体育会女子部で行ったものが残されている。

このような、女子を対象とした講演において、三宅は身体を動かすことがいかに重要であり健康にとって大切であるのか、また、その運動（体育）は女子にも重要であることを述べている。

以上のことから明らかなように、三宅は医学

界における重鎮でありながらその活躍ぶりは医学教育だけの範疇に止まらず、当時の女子教育の分野にも注目し、医学者という立場から女子の身体の改善に衛生学という視点から力を注いでいたことがわかる。

このような医学者三宅の先見性と洞察力は当時の女子の健康の維持・増進のみならず、その後の女子体育の考え方にも影響を与えたのではないかと考えられよう。

それゆえ、彼の行った講演活動は、その後の女子体育の普及と発展、さらには、広い意味での国民の身体形成過程において少なからず影響を与えたと考えられ、当時の体育指導者同様に再評価されるべきであろう。

注

注1) 『東京大学医学部百年史』の「お玉ヶ池種痘所の設立」の項目には、現在の東京大学医学部の前身となる「お玉ヶ池種痘所」設立に関った人物について以下の通りに記されており、三宅良斎の功績が理解できよう。

「安政四年（1857）年八月、下谷練堀小路

の大槻俊斎の宅へ、蘭学医伊東玄朴、戸塚静海、竹内玄同、林洞海、箕作阮甫、三宅良斎ほか四名があつまった。いずれも当時江戸で有名な実力者である。(以下省略)、その後(1858年)、江戸在住の蘭学者たちに、種痘所建築の費用と、運営の費用の抛金をよびかけた。(中略)、かくて、安政五年(1858)五月七日私設の「種痘所」が開設されたのである(下線筆者付、二重下線筆者加筆)。

・東京大学医学部創立百年記念会・東京大学医学部百年史編集委員会編：東京大学医学部百年史，pp.49-50，東京大学医学部創立百年記念会。

注2) 外国奉行支配・田辺太一(1831-1915)の従者として同行した。

注3) 1886年3月2日以降、帝国大学医科大学となる。

注4) 三宅秀が医事衛生に関する法令等の制定に中心的な役割を果たしたことについては以下を参照。

・富士川游：三宅秀先生小傳 先生五七日忌法要に際して，中外医事新報，第1255号，pp.1-6，1938。

・東京帝国大学医学部病理学教室五十周年記念会：東京帝国大学病理学教室五十年史(上巻)，pp.46-48，東京帝国大学医学部病理学教室五十周年記念会，1939。

・村上一郎：蘭医佐藤泰然 その生涯とその一族門流，房総郷土研究会，pp.206-207，1941。

注5) 「自筆講演用メモ」には「日本女子大学」と記されている。しかし、この時点での正式な校名は「日本女子大学校」である。

注6) 『日本女子大学校 学報』第二号の「校報」には、「始業式。九月十一日午前九時、講堂に於て執行す。成瀬校長、三宅博士の有益なる演説ありて散会す。両氏演説の筆記は、別欄に載せられたれば茲には省きぬ」と記されている。

・塘茂太郎編：校報，日本女子大学校 学報，第二号，p.208，1903。

注7) 「日本女子大学校規則」1905(明治38)

年度用より作成」と付記されている。

注8) 注6)の日付(九月十一日)と一致する。

注9) ここで示す1, 2, 3, 4の印は頁を意味している。

引用文献

- 1) 三宅秀，「履歴書」，個人蔵。
- 2) 塘茂太郎編：教育衛生に就いて(三十六年九月講和)，日本女子大学校 学報，第二号，p.208，1903。
- 3) 日本女子大学編：日本女子大学学園事典－創立100年の軌跡，p.357，日本女子大学，2001。
- 4) 上掲書，p.316。
- 5) 前掲書 3)，p.46。
- 6) 前掲書 3)，p.46。